東京神学大学における教員養成の理念

日本プロテスタント諸教派神学校の長い伝統を統合的に引き継いでいる東京神学大学（東神大）は、戦後の新制単科（神学科）大学として、また日本基督教団立の神学校として再出発した。当初より、全国の諸教会に伝道者・牧師を送り出すために高度な神学教育を施しつつ、同時にキリスト教主義中学校・高等学校の建学の精神を担う聖書科教師・宗教主任の育成を目指す「宗教」教諭１種/専修免許状取得の認定を文部省（現文部科学省）よりいち早く受けて今日に至っている。それは福音伝道の働きと共に、福音による真の人間と文化の形成に広く資することを目指すからである。

すなわち、教会的基盤をもつ東神大の神学教育は、福音が宣べ伝えられる対象たる人間の文化諸次元への深い関心と共に、新しい文化/価値/人格を創出する方向性をもって福音の告知に携わる伝道者養成を目指してきた。基本的に、文化主義的キリスト教と自由主義神学を克服する福音主義の立場に立って、現代教育の質的向上を図り得るような伝道を真剣に考え、それに相応しい人材養成に努めてきた。その意味において、狭小な教会中心主義や信仰復興方式の牧師養成を意図してはいない。

宗教系私立学校としてのキリスト教学校は現在、日本の初等・中等・高等の公教育の一翼を担っているが、その多くは長い伝統をもち、明治期以来のいわゆるミッションスクールに源流がある。ミッションスクールはその名の通り、一方では教育（teaching）を通して伝道（preaching）し、学習者を福音・教会に招き入れることを目論むが、他方では学習者たちがそこから押し出されて、日本を近代国家として建設し、多様な仕方で民主主義社会に寄与するようになることを目指してきた。

キリスト教学校のこのような伝統を覚えつつ、本学も、全国の諸教会と伝道に仕える教職者（牧師）でありつつ、キリスト教学校の「聖書科」常勤・非常勤の教師として働く人材を数多く輩出して、今日に至っている。また、宗教科教員免許は、牧師が教会付属幼稚園の園長となって大切なキリスト教幼児教育を担う際にも資格条件として有効に用いられている。

本学のこうした特異な使命によって、キリスト教学校の源流であり支持母体である教会が今日もキリスト教学校を支える堅固な基盤として建てられるために、また学校と教会との緊密な協力関係が時代を超えて維持されていくように、ささやかながら貢献してきた。それと同時に、教職課程履修生が最終段階に受ける教育実習の実現は、本学からの依頼に対する近隣の諸キリスト教学校の過去数十年間に亘る特別な信頼と協力による賜物である。